介護保険における65歳以上要介護等認定者の２年後の生死と要介護度の変化

武田（タケダ）　俊平（シュンペイ）*

目的　介護保険における65歳以上の要介護等認定者について，認定2年後（730日後）の生死と要介護度の変化をコホート調査することにより，要介護等認定者の予後に影響を及ぼす因子を解明して，要介護者を減らす対策を立てる。

方法　1999年10月21日から2000年4月27日にかけて，要支援以上の要介護度を認定された仙台市太白区在住65歳以上の要介護等認定者2,386人（男702人，女1,684人）について，認定2年後における生死を従属変数とし，性別，年齢階級，現住所，初回要介護度，要介護疾患の5項目を独立変数とする多変量ロジスティック回帰分析を行った。さらに，認定2年後に生存中の要介護等認定者1,549人（男440人，女1,109人）について，認定2年後における要介護度悪化の有無を従属変数とし，前記5項目を独立変数とする多変量ロジスティック回帰分析を行った。

結果　65歳以上の要介護等認定者において，認定2年後の生存に関するオッズ比は，男のオッズ比＝1に比較すると，女は2.00と有意に高かった。65–69歳の者のオッズ比＝1と比較すると，85歳以上の者の生存のオッズ比は0.59と有意に低かった。初回要支援認定者のオッズ比＝1と比較すると，要介護2認定者の生存のオッズ比は0.46，要介護3認定者は0.33，要介護4認定者は0.26，要介護5認定者は0.15と，初回要介護度が重度なほど，生存のオッズ比が有意に低かった。要介護疾患および現住所別に見た場合には，生存のオッズ比に有意差がなかった。

認定2年後に生存中の要介護等認定者において，認定2年後の要介護度悪化に関するオッズ比は，65–69歳の者のオッズ比＝1と比較すると，80–84歳の者で1.82, 85歳以上の者で1.98と有意に高かった。また，要介護疾患がアルツハイマー病のときのオッズ比＝1と比較すると，要介護度悪化のオッズ比は，詳細不明の痴呆で0.48，クモ膜下出血で0.11，脳出血で0.42，脳梗塞で0.43，筋骨格系疾患で0.24，その他の疾患で0.36と有意に低かった。性別と初回要介護度と現住所別に見た場合には，要介護度悪化のオッズ比に有意差がなかった。

結論　65歳以上の要介護等認定者について，認定2年後の生死と要介護度の変化をコホート調査した。女は男よりも2.0倍生存者が多く，女の要介護者の増加が懸念される。80–84歳の者と85歳以上の者は65–69歳の者より要介護度の悪化者が多かったが，初回要介護度が重度なほど生存者が少なく，65–69歳よりも85歳以上のときの生存者が少ないので，必ずしも高齢化の進行に伴って要介護者が増加するわけでないと考えられる。アルツハイマー病に比べると，血管性痴呆を除き，すべての要介護疾患において要介護度の悪化者が少なかった。

Key words：介護保険，要介護度，コホート研究，介護予防

* 仙台市太白区保健福祉センター
連絡先：〒982-8601 仙台市太白区長町南3丁目1-15　仙台市太白区保健福祉センター　武田俊平